

## 西行小論

野村妙子

平安時代末期から鎌倉時代へとかけて生きた西行は、古代和歌の伝統を受け継ぐ一方、その伝統からはみ出た自由な立場で歌を詠んだ歌人である。彼の歌に流れる抒情豊かな調べと共に、その清澄な味わいの中に漂う寂しさは読む者の心をうつつ。

「都離れぬわが身」と反省している西行が、慣れ親しんだ都周辺の生活から離れ、陸奥の旅への志を固めていつたのは、待賢門院の崩御（久安元年、西行二十八歳）を契機としてであろう。その前後数年間というもの、鳥羽院の落飾、崇徳院の讓位（永治元年、西行二十四歳）、翌年の待賢門院の落飾、二年後の女院崩御、更には崇徳院の、父鳥羽院との不平等、不幸な出来事が相ついだ。いずれも、西行には少なからずゆかりある人々であるだけに、堪えがたい寂しさ悲しさがある。西行の心を傷つけた。出家していたとはいえ、現実社会での出来事を西行はしみじみと味わった事であろう。

こうして西行の都から離れた生活が始まりその大部分は旅に明け暮れるのである。しかし、西行ほど生涯都に深い愛着

を持ち続けた隠者もまた珍しい。彼は旅の先々で、都を思うあまり、都恋しさの歌を数多く詠んでいる。出家後修行の為、伊勢に赴いた折には、

みやこにも旅なる月のかげをこそおなじ雲居の空にみる  
らめ

初度陸奥の旅では、

都近き小野大原思ひいづる柴のけぶりのあはれなるかな  
四国の旅では、

なにとなく都の方ときく空はむつまじくてぞ眺められけ  
る

わたの原はるかに波をへだて来て都に出でし月を見るか  
な

わたの原波にも月はかくれけり都の山をなにいとひけむ  
かへりゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり  
柴の庵のしばし都へ帰らじと思はむだにもあはれなるべ  
し

また、いづどこへともわからないが、

おもへだに暮れぬと聞きし鐘の音は都にてだに悲しきものを

旅先で何かを見るにつけ聞くにつけ、ふと心をよぎるのは、かつての都での思い出であり、その思い出に耽りながら独り寂しく涙する西行なのである。そんな西行を、未練がましい、心弱い者としていちがいにきめつけることは出来ない。むしろ旅において都を思い懐しんでいる西行の姿に、人間性をこそ見るべきであろう。今仮に、都を捨て去り、忘れて行くことに何の未練も示さない西行であるとしたなら、人としての西行の魅力は半減したであろう。この場合に限らず、そこに人間味あふれる西行の真面目が躍如としているのである。

かほどまでに執着した都を離れ、西行をして所々方々にさまよわしめたものは一体何であろうか。

幾度となく旅を重ねたその中には、仁安三年（西行五十一歳）の四国の旅における白峯陵への参拜、善通寺の弘法大師の足跡訪問、文治二年（六十八歳）の再度陸奥の旅における東大寺の砂金勧進、というような目的が考えられないこともない。しかし、これらはどこまでも表面的なものであつて、西行はそのためにのみ旅をしたなどとは思えない。孤独からくる寂しさもあつたろうが、彼は何よりも、深い味わいを秘めた自然に接することに喜びを感じた。解放された旅で見る自然に、汲めども尽きぬ無限の大きさを見た。廣大無辺な自

然の中にあつて、自己の存在が如何にちつげけなものであるかを知つた。そして、この悠久な自然を前にして、彼は自己の短い人生との比較を余儀なくされたことであろう。自然には、人間が持つ一切の醜さはなく、あるのは四季折々の美しさであり、接する者の如何なる心をも静かに優しく受け入れてくれる寛容さである。だが、時として自然の持つ厳しさに、旅のつらさを味わうこともあつたに違いない。

そのような自然の世界において、彼は花を愛で、月を眺め、鶯やほととぎすの声を聞いた。これらを友とする合間にも、常によき眺めを求め、由緒ある寺や旧跡を訪れ、身の憂いを忘れようとした。自然との交渉は、どれほど寂寞たる彼の生活を慰め、且つ美しく豊かにした事か。そして、ともすれば濁りがちな彼の詩心を清め、深めていつたことであろうか。その西行の旅について、風巻景次郎氏が、

西行の旅は何処という事なく、彼の全体に特殊の影響を与えたのであつて、旅を歌うという事を彼はしなかつた。（「西行と旅」）

と述べておられるように、西行は、ただ自然を美しいと眺め、歌うだけの所謂叙景歌人ではない。西行は自然を愛し友とすることを願つて、自ら自然の中に没入していつたのである。そこに、自己の世界を切り開こうとする西行の積極的な姿勢が見られる。

世を連れて伊勢の方へまかりけるに、鈴鹿山にて

鈴鹿山うき世をよそにふりすていかになりゆくわが身なるらむ

東の方へ修行し侍りけるに、富士の山をみて

風になびく富士のけぶりの空にきえてゆくへも知らぬわが思ひかな

詞書からもわかるように、前者には、出家後間もない青年西行の心が、後者（この歌は彼が第一の自讃歌としていたものである）には、六十九歳の老歌僧西行の心が詠まれている。だが、この二首の歌の根幹にあるものは、自分自身わかない何かに憧れ、それにつき動かされて旅を続けている西行の心である。この何かに憧れる気持が、西行は人一倍強く、その気持の中に生きている人間であった。そして、それは終生失われることなく保たれたのである。他にも、

世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせむ

見るも憂くいかにかすべきわが心かかる報いの罪やありける

うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかはせむ

といった歌がある。心と肉体が分離し、自分で自分の心がどうにもならず、その心そのままにあてどもなく漂泊を続けねばならなかつた。そこには、感情に溺れ自己を見失つた西行ではなく、絶えず自らの心を見つめ、自己に誠実であろうとし

た一歌僧の真摯な姿があつた。隠遁孤独の境涯において、頼むべきものは、自らであり、自らの心であつた。

こうして、一所不住、漂泊の旅に身を委ねた西行にも、草庵といういいこの場があつた。しかし、そのいいこの場であるべきはずの草庵もまた多く孤独との戦いの場となつた。所詮、孤独の人である西行を、慰め励ましてくれるものは花であり、月であり、鶯であり、松であり、その他諸々の自然であつた。このような草庵生活において、自然を友とし、語りかけ愛しむ西行のその心の片隅には、常に人間を慕う強い気持が存在していたのである。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬山里

山里にうき世いとむ友もがな悔しく過ぎし昔かたらむこの二首の歌に、西行の人間思慕の声を聞くことが出来る。これこそ西行の偽らざる姿であるといえよう。その草庵生活の有様を、「西行上人談抄」に見ると、

西行上人二見浦に草庵結びて、浜荻折り敷きたる様にて哀なるすまひ、見るもいと心すむさま、大精神菩薩の草を座とし給へりけるもかくやおぼしき。硯は石の、わざとにはあらず、水入るゝ所くぼみたるを被置たり。和歌の文台は、花がたみ、扇やうのものを<sup>あ</sup>用ゑき。歌のことを談ずとても、一生幾ばくならず、来世近き<sup>あ</sup>にありといふ文を口ずさみにいはれし、哀に貴くおぼえし。

今も面影たえぬ道忘れがたし。

と記されている。これは西行がその晩年を過ごした伊勢での様子であるが、当時の草庵生活は、おおむねこういつた程度のものであつたらう。

山里は庵のま柴吹く風の音聞くをりぞ冬は物うき  
身にしみしをぎの音にはかはれどもしづく風こそげには  
物うき

自ら清貧の生活に甘んじた西行も、さすがに、草庵で迎える冬には堪えがたく、心身共に苦しみを味わつたようである。が、そのような中にあつて幾多の試練をも乗り越え、自己を精神的にも肉体的にも鍛えていつた。

訪ふ人も思ひたえたる山里のさびしさなくば住み憂から  
まし

先の人間思慕の歌とは対照的な歌である。出家した西行にとつては、草庵の寂しさに堪え得る精神を培う境地にこそ、本来求める世界があるのである。

先の宮廷での不祥事に、そのきざしをみた保元の乱は、西行三十九歳の時起こつている。保元元年（一一五六）七月二日、鳥羽院崩御、続く十一日乱となり、崇徳院は破れ、十二日には仁和寺にて薙髮、二十三日には讃岐に流された。これによつて西行の在俗時代からの宮廷関係が一変したわけである。

この間、都では保元の乱について平治の乱（西行四十二

歳）が起こり、平清盛の全盛期を迎える。そして政権は、貴族の手から武士の手に委ねられるのであるが、この保元の乱に端を発した世の乱れは、治まることを知らぬかのように、清盛の専横、それに対する勢力として源氏の抬頭、更には源平二氏の争いへとめまぐるしく發展、源氏の統一により漸やく治まりを見るのである。西行もまたこの動乱を生き抜いたのであるが、まのあたりにくりひろげられるこの浅ましい世の有様を、どんな思いで眺めたことであらうか。

こうした栄枯盛衰の激しい世に生をうけた西行が、その心に常に抱懐していたのは厭世思想であつた。

何事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとほ  
き

いかがすべき世にあらばやは世をも捨ててあな憂の世や  
とさらに思はむ

情ありし昔のみなほしのばれて長らへまうき世にもある  
かな

遁世して捨てた世を、なお且つ厭う西行の心に、もはや堪えしのぶ以外に道がないというやるせない寂しさが漂つてい  
る。

ながらへんと思う心ぞ露もなき厭ふだにもたへぬうき身  
は

といいながら、一方、

またれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらばきかむと

すらむ

と、淡い「生」への期待もある。それが、

こえぬればまたこの世にかへりこぬしでの山こそかな  
しけれ

はかなしやあだにいのちのつゆきえて野への我が身やお  
くりおかれむ

と歌うに至つては、「死」を悲しんでいる西行の姿が、はつきりと浮かび上がってくる。ここに何か矛盾するものを感じないでもないが、心乱れてしまった自己を、あるがままに素直に歌つたところに、人間としての西行が存在するのである。世を厭いながらも捨てかねるもの、それが「生」である。たとえ、姿形がどのようなであらうとも、生を喜び、死を悲しむのは、人間の本能である。

では何故、厭世の心が生じるかといえは、一言でいって、それは世が無常だからである。人生が無常だからである。世の人々は、その無常の生活に甘んじている。が、西行には堪えられなかつた。それ故、出家遁世し、歌を作ることに、「生」への道を見出したのである。そこには、人生の逃避者としての一抹の哀愁が漂っていると共に、人生を拒否し、生き抜こうとする力強さがあふれている。

漂泊の歌人として、隠遁孤独の境涯の中に展開した西行の長い人生をかえりみる時、彼の歩んで来た道は、決して安易なものではなかつた。現実社会に失望し、逃避したその時か

ら、孤独と漂泊の人生が始まり、その間、作歌と自己の生活とを一致させるといふ、彼独自の世界を築き上げたのである。その強い意志とあくなき情熱に、私は感動せずにはおられない。

注

(1)、「山家集」下雑に見える歌

世の中を捨てて捨て得ぬ心地してみやこ離れぬわが身  
なりけり

出家後の西行の心境が歌われており、自己を把握し、厳しく反省している。

(2)、「山家集」羈旅歌には、多く都への思慕が歌われている。だが、何のために旅するかについては語られていない。ただ、「撰集抄」巻第十二話に、松浦貞俊氏も指摘しておられるように、「世をすつとならば、かくこそあらまほしくて、身のちからもいたくつかれ侍らざりし比、広く国々を經まはりて、やんごとなき寺々、面白き所々徘徊し侍りしが、指当りて身のうれへも忘れ侍りしかば、かくて一期を過したらんも罪深からじと覚え侍りき」という一文がある。これは西行の旅の目的と思しきもので、注意すべき文章である。

(3)、「独居のさびしさを愛する心さえが、裏返しに見れ

ば、世間恋しきの現れであることである。独居をさびしと感ずるのは、人に逢いたい心を阻止するところから生ずる。真に人に逢いたくない人には、独居は決してさびしくない筈である。(中略)この意味からすれば、最も世間人に背をむけているかに見える草庵人こそ、最も美

## 伊 良 子 清 白

木 村 喜 代 子

しく世間人と抱き合っている人だと言つてよいであろう。(石田吉貞著「中世草庵の文学」)  
これは、西行はじめすべての草庵人の心を的確にとらえ、分析している言葉といえよう。

### 一、清 白 と 詩

—— 書翰を中心にして ——

河井醉茗、横瀬夜雨と共に、文庫派の三羽鳥といわれた伊良子清白、なかでも彼は後に日夏耿之介氏が「泣有二家に雁行せる逸才で、鉄幹の措辞をも凌ぎ、泡鳴の粗笨に遠く卓れて、林外の形式美を遙かに超越した……稀に見る天稟の技能の所有者」(「明治大正詩史」巻ノ上四三頁)と、称賛の辞を惜しまなかつた程の詩才を有していた。しかしながら、七十年にわたる生涯を通じて、彼が詩作活動を行なつた期間、明治二十七年六月「少年文庫」六月号に「朝の小蝶」を發表したのを皮切りに、明治四十年「文庫」才三十四卷才五

号の「七騎落」を最後として僅か十三年間に過ぎない。そしてその間にはたとえ京都府立医学校(現在の京都府立医科大学の前身)卒業の年(明33)のように文庫への發表作品が全くない年もあるのである。しかも、その十三年間を彼は詩作にのみ費したのではなく、生活の基礎を本業の医業に置いていた。その十三年間というものは、彼にとつて生活と詩との間の彷徨の期間だともいえる。

近年、みず書房より刊行された河井醉茗夫人島本久恵氏の著書「長流」(全八卷)には文庫派詩人の群像が描かれているが、そのうち主に四卷・五卷には清白について詳しく書かれている。それを讀むと、詩への情熱に燃える清白と、生活に忠実な清白が入れかわり立ちかわり現われてくる。そう